

6. 日露戦争における第一軍作製の地図ならびに書類：目録と解説

小林 茂（大阪大学名誉教授）

2013年に古書として購入した日露戦争期の地図ならびに書類について目録と解説を示すのが本稿の目的である。これらについては、購入後図書としての登録は済ませたが、関連資料の不足のため、十分な位置づけが困難な状態がつづいてきた。しかし今回、満洲軍総司令部ならびに第一軍作製の20万分の1図ならびに8万4千分の1図の目録ならびに解説（本誌掲載の小林2022）を準備する過程で、日露戦争における第一軍の構成や活動について知ることが多く、その観点からここに紹介する資料を再検討したところ、最低限ながら解説を加えることが可能なことがわかり、以下それを示したい。

なお日露戦争における第一軍（司令官：黒木為楨大将、参謀長：藤井茂太少将）は、第2師団、第12師団、近衛師団と三つの師団を主体とする軍で、ここに紹介する紹介する地図や書類のほとんどは、それが作製したこととなる。第一軍は、日露戦争の陸戦の緒戦となる鴨緑江渡河作戦を担当したあと、遼東半島を北上した日本軍の最右翼に位置し、東部の山岳地帯を前進し、奉天会戦以降は戦線の東部で活動した。上記の小林（2022）では、奉天会戦以後に第一軍が作製した20万分の1図、8万4千分の1図を主体に検討したが、いずれも地形図の要素の強い地図群であった。これに対して本資料は沙河会戦（1904年10月）以後に作製された、主題図ともいえる地図を含んでいる。また第一軍の通信網図や宿営図、さらには鴨緑江渡河作戦一周年を記念する行事の会場に関する図もあり、戦闘以外の側面を示し興味ぶかい。以下では、まず地図を取りあげ、作製時期順に検討する。

最初の1「第一軍参謀部製十万分一補修興隆屯附近之圖」（図1）は、図の中央に描かれた、「切取線」と書かれた破線で囲まれた範囲を切り抜いて、第一軍参謀部製の10万分の1図に貼り付けるものである。右側中央に描かれている奉集堡の大きな集落から、奉天の南方地域の図であることがわかる。タイトルにある「興隆屯」は図の中央やや南より（奉集堡の西南西）に描かれている。



図1：第一軍参謀部製十万分一補修興隆屯附近之圖
（周辺部をカット）

こうした貼り付け用の補足図は少なくないが、奉天付近について作製された10万分の1図の場合は、時期が1905年3月7日と遅れるが、小林（2022）の表2-2に掲載した1「總司令部調製十万分一奉天、奉集堡ニ貼用（原圖露版八万四千方）

一圖)」がある。第一軍参謀部が作製したもので、やはり切り抜いて貼り付けるようになっている。この西端近くにやはり上記の奉集堡の集落が描かれており、位置関係がわかりやすい。ただし、この奉集堡周辺の両者が重なる地域を比較すると、違いが大きく、この地域の地理情報の収集が

本図の作製された時期（1904年12月）には、まだ不十分であったことがうかがわれる。これに対して、奉天会戦（1905年2～3月）の最中に作られた第一軍参謀部製の図は、そうした状況を大きく改善したとみてよいであろう。

表 日露戦争における第一軍作製の地図ならびに書類

番号	タイトル	刊期	刊行機関	縮尺・サイズ	備考
1	第一軍参謀部製十万分一補修興隆屯附近之圖	1904年12月 修正	第二師団参謀部	10万分の1 27.1×19.8cm	切り抜いて10万分の1図の奉集堡附近に貼り付け用
2	(仮題)印画紙英文黒溝台付近図	1905年2月?	第一軍参謀部?	約20万分の1 27.1×39.3cm	外国人観戦武官・通信員に対する説明用?
3	(仮題)印画紙英文奉天南東方図	1905年2月?	第一軍参謀部?	約22万分の1 27.3×39.2cm	外国人観戦武官・通信員に対する説明用?
4	(仮題)印画紙英文清河城付近図	1905年2月?	第一軍参謀部?	約22万分の1 27.3×39.4cm	外国人観戦武官・通信員に対する説明用?
5	第一軍司令部第一次躍進時ニ於ケル通信網略圖	1905年2月 21日改正	第一軍参謀部	ダイアグラム 27.4×39.1cm	電信線・電話線を図示、第二軍・第三軍・鴨緑江軍との連絡も記載
6	奉集堡及唐家屯附近敵兵工事畧圖	1905年2月	近衛師団参謀部測圖	2万分の1 75.8×92.5cm	ロシア軍の砲兵陣地、鹿砦、鉄条網も示す
7	高大岑附近露軍防御陣地畧圖	1905年2月 (推定)	—	5万分の1 29.2×42.2cm	高大岑は北上すると撫順に至る峠
8	鴨緑江會戦記念會設備畧圖	1905年5月 1日	第一軍司令部	38.5×27.5cm	
9	宴会場畧圖	1905年5月 1日?	第一軍司令部?	29.2×42.9cm	軍隊参拝所には、近衛師団・第二師団・第十二師団・近衛後備混成旅団・後備歩兵第五旅団・後備歩兵第十三旅団
10	第一軍宿營畧圖	1905年6月 12日	第一軍参謀部	20万分の1 40.6×53.2cm	近衛師団・第二師団・第十二師団など
11	火石岑平崗附近露軍防御陣地畧圖	1905年9月	第一軍参謀部	8,400分の1 58.4×39.7cm 58.4×39.8cm	2枚の図を接合、葉赫站～赫爾蘇、防禦構築物平面及断面図
12	第一軍司令部在職者一覽表	1905年9月 20日調	第一軍参謀部?	27.0×39.8cm	墨字で現職者、朱字で転出者を示す
13	第一軍鴨緑江畔ニ向テスル行進梯団区分	1904年4月?	第一軍参謀部?	袋とじ、計5丁 24.0×16.3cm	第一軍司令部の野紙に記入
14	(仮題)旅順包圍戦概況図	1905年1月 以降	第三軍?	2万分の1 77.8×89.3cm	4枚の図を貼り合わせている、青で日本軍陣地や塹壕、朱でロシア軍陣地を印刷

つづく三つの図(2~4)は、印画紙様の紙に複写された図で、各図のサイズはB4判であるが東西につなげて見るものと考えられる。いずれの図も地名をアルファベットで書き、外国人用に作られたものと考えられる。西側の黒溝台付近の図(図2)は、右下(東南端)に遼陽を描き”LIAO YANG”とするほか、河川では太子河を”R.Taitzu”、渾河を”R.Hun”とウェード式と思われる表記で示すが、その他については黒溝台を”Kokkōdai”とするなど音読みのローマ字表記で、長母音記号も記している。中央の図(図3)では、左上部に奉天を示し、”Moukden”とするほか、左下の東清鉄道南区線の支線の東端に位置する烟台炭坑を”Yentai Colliery”としている。その北に第一軍の司令部の置かれた半拉山子については、”Hanrasanshi (Palasanzu)”と両者を併記する。他方、右側下部の激戦の行われた本溪湖について”は Honkeiko”とするなど、ほとんどの地名は漢字の音読みのローマ字表記となっている。

上記両図の中央を東西に太く青い線が屈曲するように引かれ、これは日本軍の前線を示していると考えられる。この北側には、薄い赤でローマ数字とアラビア数字を組み合わせてロシア軍側の部隊の所在を示しているが、この青く太い線の

南側の日本軍の配置については、何も示されていない。また西側の図(図2)では左上に大きく丸を描き、上に”Mischenko’s Detachment”(ミシチェンコ支隊)として、それを構成する”Don Cossack Divi.”(“Divi”は Division)など部隊名を記入している。

最も右(東)側の図(表の3、図は省略)は、中央に清河城(“Seikajō”)を示し、下部に太子河の流路を示している。中央部に東西に延びる赤の破線が示されているのは、ロシア軍と日本軍の間の大まかな戦線の位置を示すためと思われる。左上からは馬車鉄道線路(“tramway for horse car”)が南東にむけてのび、三龍峪(“Sanryukoku”)に達しており、その右には赤で”Lennenkamp’s Detachment”(レンネンキャンプ支隊)と記し、その構成部隊を示している。

このような内容から見て、この3枚連続の地図は、1905年2月頃の戦線を示していると考えられ、そのカバーしている範囲からして満洲軍総司令部でつくられたと考えられやすいが、後述の5「第一軍司令部第一次躍進時ニ於ケル通信網略圖」が同じサイズの印画紙様の紙であることから、第一軍が随行している観戦武官か報道関係者に配布するために作製したものと考えられる。

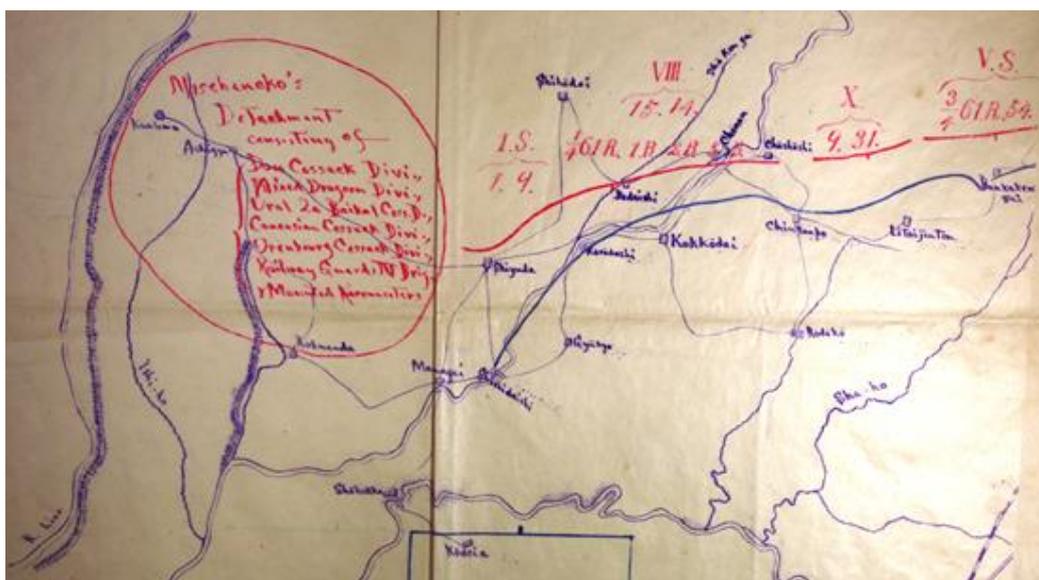


図2：(仮題) 印画紙英文黒溝台付近図(部分)

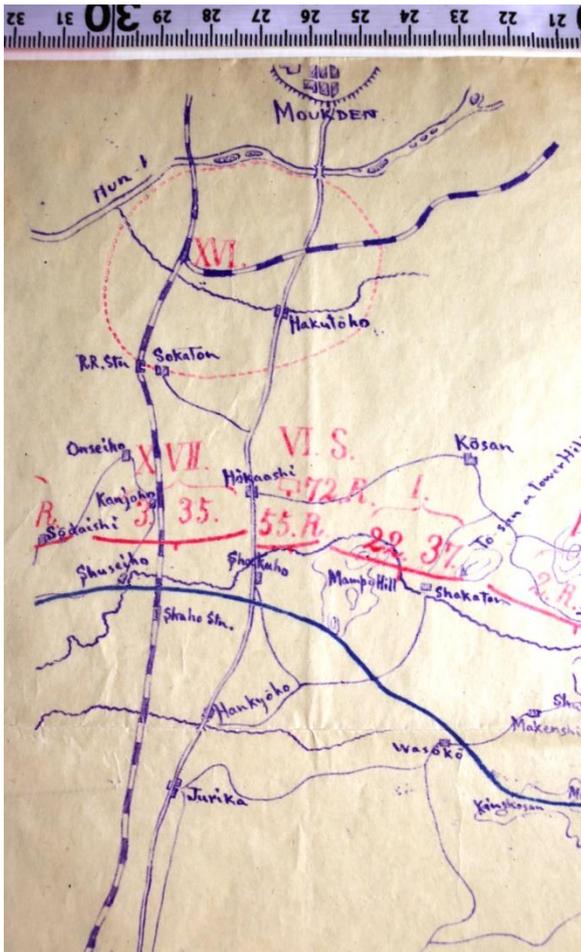


図3：(仮題) 印画紙英文奉天南東方図 (部分)
 左側の鉄道は東清鉄道南区線
 左側の鉄道は東清鉄道南区線

ところで、このように戦線の南側（日本側）について何も記さないのは、主に欧米人であった観戦武官や報道関係者を通じてロシア側に日本側の戦闘態勢が知られるのを防ぐためと考えられる。日本側のこうした情報管理は、その他の方面

でも徹底しており、とくに報道関係者はそれにかんがりの不満をもったとされている（松村 2004、また長谷川 2006: 125-131 も参照）。なお第一軍と行動した観戦武官としては、英国軍の高級将校 Ian Hamilton (1853-1947 年) が有名で、その日露戦争従軍記 (Hamilton 1905-1907) は、和訳 (ハミルトン 1907-8; ハミルトン 1935) のほか、フランス語・ドイツ語・ロシア語にも訳されたという。この原本には多数の写真やスケッチのほか地図 (色刷り) もあり、ここで検討している図も反映されている可能性があると考えて検討したが、Hamilton が第一軍に従軍したのは沙河会戦までで、その後は南山や旅順の視察を行ったため、それに対応する図はないということがわかった。

このような外国人向けの地図に接するのは、筆者には初めてのことで、今後は日本軍がこの種の地図をどのように位置づけ、準備したか、という角度からの研究も必要なことを痛感した。

つづく 5 「第一軍司令部第一次躍進時ニ於ケル通信網略圖」(図4) も上記三図のように印画紙様の紙に複写されており、青で電信線を、赤で電話線を示している。当時第一軍司令部は花勾(花溝)にあり、その指揮下にある第12師団は東方の上石橋子付近、第2師団はさらに東方の高官寨付近、近衛師団は西方の上柳河付近にあったことがわかる。こうした通信線は満洲軍総司令部の位置した西方の烟台に通じ、そこから第二軍、第三軍、第四軍に連絡していた。

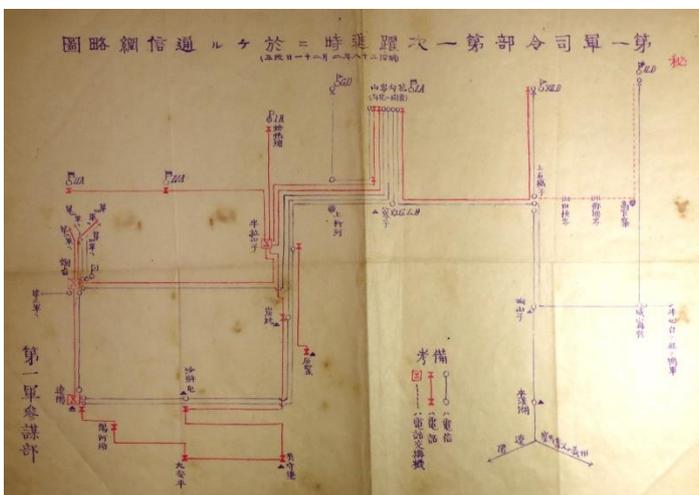


図4：第一軍司令部第一次躍進時ニ於ケル通信網略圖 (周辺部をカット)
 電信線は青、電話線は赤で描く

6「奉集堡及唐家屯附近敵兵工事畧圖」(図5)は、4枚の図を貼り合わせた大きな図で、西方北部の奉集堡(1「第一軍参謀部製十万分一補修興隆屯附近之圖」にもあらわれる中心地)の北方から東にのびる丘陵の南面に展開するロシア軍陣地をくわしく示している。各陣地は狼奔(落とし穴)・鹿砦(障害物)・鉄条網で護られており、一部の陣地について大砲の種類や門数も示している。南東部には赤鉛筆の書き込みがあり、誤りを訂正するほか日付(「二月廿六日」)もみえる。奉天会戦のための図であることがあきらかで、表の3図(画像は省略)の記載ともほぼ一致する。

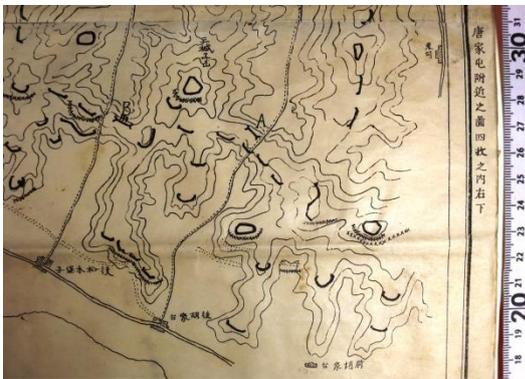


図5：奉集堡及唐家屯附近敵兵工事畧圖(部分)

7「高大岑附近露軍防禦陣地畧圖」(図6)は戦線の東方の高官寨北方のロシア軍陣地を図示する。等高線や道路は黒で印刷するが、図のタイトルや縮尺、さらに図の北方に描かれたロシア軍陣地は朱で印刷する。この方面を担当した第2師団の偵察によるものと考えられるが、印刷は謄写版ではなく、第一軍参謀部が行ったものであろう。



図6：高大岑附近露軍防禦陣地畧圖(部分)

以上、奉天会戦に関連した図を示したが、以下はそれ以後のものとなる。8「鴨緑江會戰記念會設備畧圖」は、1905年5月1日に行われた鴨緑江渡河戦一周年を記念する会の会場を示すもので、第一軍司令部附近に作られた祭壇や参拝軍整列所や宴会場の配置を図示する。また9「宴会場畧圖」の左側では、上部に祭壇、下部には各師団・旅団などの参拝所を示す。右側は、食堂や売店、寿司や天ぷら、ビール、うどん、おでん、汁粉の屋台を示す。相撲や競馬、飾り物などの余興もあった。陸戦では大きな戦闘は終了し、祝賀の雰囲気になっていたようである。

第一軍第2師団所属の第16連隊の一員として従軍した茂沢祐作の日記では、白李勾という集落の近く(鐵嶺付近と考えられる)で、所属連隊による記念会が行われ、数日前から準備して、5月1日に各中隊が競う装飾物のコンクールや相撲、芝居、剣舞、踊りがあった(茂沢2005:189-194)。

10「第一軍宿營畧図」(図7)は、1905年6月になって長期的滞在を予定していたのか、開原～鐵嶺の西方の農村地帯での宿营地を図示する。一つ一つの集落に滞在できる人数が少ないためか、それは広大な地域に分散している。師団や旅団ごとに大きく分けて描かれているが、北東方面では警戒線・抵抗線と記した二つの線を描きロシア軍の襲来に備えている。上記の日記の筆者である茂沢が滞在した集落である打家溝と時応溝(茂沢2005:208-217)の名前もみられる。



図7：第一軍宿營畧圖(部分)

上記の茂沢の日記には、これに限らず通過した地点や宿泊した集落の名称が詳細に記載されている。ただし、彼がその漢字表記をどのように知ったのか、さらにはどのような地図を利用したのか、という点については残念ながらふれていない。茂沢は指示によって地図の複写をするほか、偵察を行いその報告として地図や見取り図を提出している場合もあり（小林 2011: 127-128）、そうした任務を考えると、利用した地図について日記に書くことが禁止されていた可能性がうかがわれる。

11「火石岑平崗附近露軍防御陣地畧圖」（図 8）は、日露戦争の休戦議定書が調印された 1905 年 9 月 1 日ころに作製されたものと考えられる。2 枚の図を左右につなげてみるようになっており、左図には左下（南西）から右上（北東）に開原付近から吉林に至る、いわゆる「吉林街道」を描き、それに沿う火石岑子の集落を上端近く（図 8 では左下）に示す。他方右図の中央やや左寄り（図 8 では郭外）に平崗の丘陵を描く。左図左上の注記では、火石岑子～平崗よりも西側は 8 月上旬、東側は 9 月中旬にもどってきた間諜によるロシア軍陣地の様子を示すとしている。周辺は空白である

が、重要部分は等高線を示し、道路を見下ろすような丘陵の頂部にロシア軍の陣地を朱で描いている。また左図の下部には、陣地の防禦構築物の断面を類型化して描く。このうち等高線や道路は小林（2022）の表 1-6 の 9「十里堡」や 13「（赫爾蘇貼付図）」、さらに 15「仮題：次榆樹貼付図」の一部と一致すると思われる部分がある。

このような図が、休戦協定の締結以後も描かれた背景として、その指示が戦線の末端にまで至るまでに時間がかかったことをうかがわせるが、茂沢の日記では、休戦協定にもとづく休戦命令が上記の時応溝に伝えられたのは 9 月 14 日であった（茂沢 2005: 284）。

12「第一軍司令部在職者一覧表」は地図ではなく、1905 年 9 月 20 日に作製された名簿となる。第一軍が活動した期間に在職した陸軍士官や事務官の氏名と在任期間を示している。すでに離任した者は朱字で示しており、この「幕僚」のうち「司令部附」となっている日野強（歩兵少佐、1904 年 2 月 18 日～10 月 1 日在任）と山岡寅之助（歩兵少佐、1904 年 3 月 7 日～5 月 12 日在任）が注目される。



図 8：火石岑平崗附近露軍防御陣地畧圖（部分）

日野は日露戦争前に参謀本部出仕となり、「北韓」地方の調査を行い、日露開戦後は第一軍に随行するほか、1905年5月には大本営勤務となり、同7月に「大本営陸軍幕僚」として『北関兵要地誌』を刊行している（JACAR: C0604101500, C13070025400～C13070026900）。他方山岡は、日露戦争直前に朝鮮平安道の「機密測圖」を行い、その報告書を提出するほか、開戦後は陸地測量部の班長となっていたが、測量手2名と共に「作戦地々形ニ関シ諮詢ニ應セシムル為メ」第一軍に派遣された（JACAR: C09123104700, C06040586200）。ただしロシア軍との交戦は鴨緑江渡河作戦から開始されたため、山岡らの任務は早く終了したようである。山岡はそのご10月には戦線の背後で測量を行う臨時測図部の第二次派遣に際し、その班長として遼東半島にむかった（陸地測量部、刊期不詳、151-152）。

なお小林（2022）の後半では、第一軍が作製した地形図類を検討した。その編集や印刷作業にあたった者についてはまだ手がかりが得られていないが、この名簿にもその氏名が掲載されていない可能性が高い。

13「第一軍鴨緑江畔ニ向テスル行進梯団区分」も地図ではなく、また日付もはいつていないが、1904年4月ころに作製されたものと考えられる。「浅田支隊」を先頭に、近衛師団、第十二師団、第二師団の順となり、各師団はそれぞれ三つの梯団にわかれる。第十二師団の先頭は「昌城支隊」となっており、北方を通るルートがあったことがうかがえる。鴨緑江に向かう際の計画と考えられ、この通りに実施されたかどうかは検討を要する。

14「(仮題)旅順包圍戦概況図」(図9)は、もともと第三軍によって作製されたものと考えられ、この地図と書類群に加えられた背景がよくわからない。貼り合わせた2万分の1地形図に、ロシア軍の陣地を朱、日本軍の陣地を青で示している。また北方からの包圍線の前進を示すために、1904年7月30日、8月8日、8月15日、8月24

日、9月22日、10月30日、12月6日、1905年1月1日の日本側の前線の位置を表示する。山陵に位置するロシア軍の主要陣地にはジグザグに青の塹壕線が迫り、日露戦争の最終局面が、どのように進んだかについても説明しようとしている。

なおこの図のベースマップは、日清戦争時の臨時測図部による戦史用の測図によって準備された地形図（「水師營」、「八里庄」、「椅子山」、「旅順口」の4図幅）で、『明治廿七八年日清戦史』の付図のベースマップとしても使われており、その元図はアジア歴史資料センターの小山史料に公開されるようになった（小林2021）。包圍戦を戦った第三軍の幹部には評価が低かったこの地形図は（長南2015: 457-463）、日露戦争の戦場となった地域の日本製図のなかでは最も精度の高い図であったことを改めて指摘しておきたい。

なお、ロシア側が作製した地形図の系譜をひくと考えられる、Schwarz（1908）の付図“Plan of Port Arthur Showing Defenses and Siege Works”（7万分の1）と比較すると、陣地の構成や位置、平面形に差がみとめられ、本図は旅順のロシア軍の降伏から間もない頃に作製されたことが推測される。すでに一部検討したように（藤森ほか2011）、日本軍は旅順包圍戦の戦史用に詳細な地図を作製しており、日露戦後の旅順要塞の検討がどのように進められたか考える上でも興味深い図と考えられる。

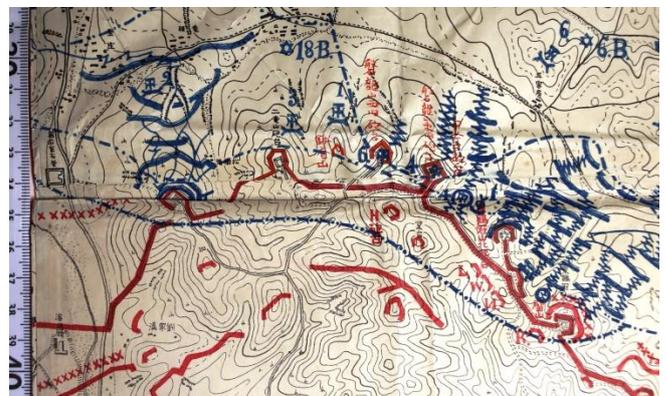


図9：(仮題)旅順包圍戦概況図（部分）

以上、第一軍が作製した地図を中心とした資料を検討した。ここに示した地図は、小林（2022）で検討した地形図類をくわえても、日露戦争中に第一軍が作製し・印刷した地図のごく一部と考えられる。その他にどのような地図が印刷されたかについて推定するに際して、手がかりのひとつになる程度のものにすぎない。

それでもロシア軍の陣地に関するものがここで示したものの半分を占める点は、注目されてよい。日露戦争に関連する地図をみると（本誌次号では、第四軍作製のロシア軍陣地図を紹介する予定である）、ロシア軍は日本軍と対峙する場合には、その障害になる構築物をさかんに築造していたことがわかる。「会戦」といっても、こうした構築物のため戦線は長く延び、また一部では攻城戦のような様相さえ帯びることになった。そのような事情を考えると、各地のロシア軍の陣地に関する地図を作製した背景が理解できるように思われる。また敵軍の陣地は直接観察しにくく、情報収集には現地出身の間諜を使うことになった点も注目される。11「火石岑平岡附近露軍防衛陣地畧圖」の場合、構築物の断面図までも示されているところから、観察事項について間諜に詳細な指示が行われたと推定される。

そのほか第一軍の通信網や宿営、さらには記念行事の会場の設営まで、第一軍を考えるのに役立つ地図類が得られた。通信網や宿営は、戦争のインフラともいえるもので、とくに通信は、日清戦争と比較すると大きく変化したと考えられる。満洲軍における電信は、強引に設定された複数の軍用ルートを通じて日本本土に直結しており（JACAR: C03020169900, C05110109700）、満洲だけでなく中国大陸各地に新設された観測所からの気象データもそれによって集約されるようになっていた（小林 2019）。

このような側面はこれまで十分に検討されているとはいえない日露戦争の側面を示すものであろう。さらに関連する地図の収集をつづけたい。

文献

- 小林茂 2019. 「日清・日露戦争期の日本の気象観測網の拡大と電信線」日本地理学会発表要旨集 2019s: 209.
- 小林茂 2021. 「日清戦争に際し戦史用に作製された2万分の1地形図」外邦図研究ニューズレター12: 71-80.
- 小林茂 2022. 「日露戦争末期の満洲軍総司令部ならびに第一軍作製の野戦用図：解説と目録」外邦図研究ニューズレター13:
- 長谷川怜 2006. 「日露戦争と戦場の諜報戦：『発信原稿、満洲軍参謀部諜報部』の再発見」軍事史学 42(2): 118-141.
- ハミルトン、サー・イアン（第一軍従軍武官英国陸軍中將）1907-1908. 『日露戦役観戦雑記適譯：一名一参謀將校之隨筆』大阪新報社（上下2巻）.
- ハミルトン、イアン 1935. 『思ひ出の日露戦争』平凡社.
- 藤森衣子・三崎護・中村優稀・鈴江文子・後藤敦史・小林茂 2011. 「アメリカ議会図書館蔵、手描き旅順要塞砲台図および5千分の1地形図：解説と目録」外邦図研究ニューズレター8: 22-43.
- 松村正義 2004. 「日露戦争と外国新聞従軍記者」外務省調査月報 2004年度2号: 19-43.
- 茂沢祐作 2005. 『ある歩兵の日露戦争従軍日記』草思社.
- 陸地測量部、刊期不詳『陸地測量部沿革史（草案）後編』（第二次世界大戦後の日本地図資料協会によるリプリントによる）
- Hamilton, Ian 1905-1907. *A Staff Officer's Scrap-book During the Russo-Japanese War*. Edward Arnold, 2vols.
- Schwarz, A. von 1908. *Influence of the Experience of the Siege of Port Arthur upon the Construction of Modern Fortresses*. Washington: Government Printing Office.